

れ、人々の生活も一歩一歩確立された。

生計の多くを口分田によつて支えられていた農民は、稻の上納と同時に特産物の上納、労役、兵役など租、庸、調など租税の負担を背負い、かなりきびしい生活をしいられ、これに堪えかねて家を捨てて流浪した者もあり、当時の租税の負担を総計すると、收穫する稻の約三割の代価に相当したと文献にしるされている。

当時、水田の收穫は一反(一〇アール)当たり平均約七斗で、栽培技術も非常に幼稚で粗放的で、農具も鉄製のものが一部で使用されはじめたようであったが、この地で農民が果たして使用していたか不明であるが、室町期に至つては鉄製の農耕具の使用、農耕用としての牛馬の飼育が多くなっている。一方、農作物の種類も増え栽培技術もこの時期になるとかなり進歩がみられ、稻の收穫では穂刈、抜穂から根刈りに移行している。

作物の種類では、灌漑の便利な水田は稻が、畑には麦、粟、綿、桑、藍、エゴマ、豆などが栽培された。

第二章 中 世

第一節 鎌 倉 時 代

概 観

源頼朝は、建久三年（一一九二）征夷大將軍に任ぜられ、鎌倉幕府を創立した。

これより天下の政治は天皇を中心とする公家政治から、將軍を中核とする武家政治に移り、建武中興によつて再び天皇政治に還るかに見えたが、莊園制における支配権を、守護地頭が握り得た時代の流れは、いかんともすることができず、室町幕府によつて武家政治は引きつがれた。しかし政治の実権は動揺し、下剋上の戦国時代を展開していく、この時代およそ三百五十年間を、中世とよんでいる。

平安期・王朝政治の時代にあつて、当地方は、稲沢の地内にあつた国府に駐在する国司によつて掌裡されていたが、従来、地方の豪族は、多くの土地を私有し、農民を私有化して、しだいに領主的性格を強くしていった。しかし、この国司の支配を無視することができず、そのために、自領を中央の権勢に寄進して税を免れんとする風潮が高まり、莊園化がしだいに大きくなつていった。

当時丹羽郡地内には、稲木庄（稲置莊）があつた。当然大口地区もほとんど、この莊園に含まれていたと思われる。この稲木庄は、良峯惟光が自分の所領であつた小弓莊を藤原道長に寄進してそのもとで勢力をのばし、その子季高

は丹羽郡司となつて丹羽氏を称し、その子高成は大泉神社の宮司となり、妹を東国の平氏、平広常に、また娘を平忠盛に入れて平家の権勢を背景に当地方に君臨したが、自分の所領を稲木庄と称してこれを名目上、後白河法皇の寺である長講堂に寄進した。

すなわち朝廷と平家の権力のもとに自領の保護とみずからの権力の伸張を図つたのである。

当時近郷の託美郷（扶桑町高雄地内に式内託美神社あり）は、伊勢神宮の莊園となつていたので、大口の地はこの稲木庄と託美荘にも属していたと思われる。その帰属は時代と、勢力の關係で必ずしも一定ではなかつたと見るべきであらう。

いづれにしても、当時を確認する史料はきわめて乏しい。平家につづく源氏による鎌倉幕府創設につづく源平争乱の中にあつて、平家を頼つた丹羽氏（前野氏）は、この戦いに参加して敗れ、一時大和に隠れ住んだといわれている。

源氏も三代にして正統の將軍の血族が絶え、執權政治による北条氏の時代にあつて、後鳥羽上皇は、王政復古を圖

荘名	区	域	村々
稲置荘	寄木・岩倉あたりを中心に北の方は犬山善師野、南の方は一宮北島の辺		
高雄荘	木津・般若あたりから南は佐野小淵の付近まで数十村		余野・小口・外坪・大屋敷・長桜 ・御供所村がこの荘に属した。
小弓荘	継鹿尾・栗栖・羽黒・富士・安楽寺など七・八か村		河北村がこの荘に属していた

つて、承久の乱を引きおこされたが、この戦いには尾北の地は、もつとも華やかな主戦場となつた。

上皇の拳兵の召に応じて、尾張の山田重忠らをはじめとして、近畿・西国を中心に武士団の参加はあつたが、幕府では北条義時もまた西進の計をたて、子泰時、

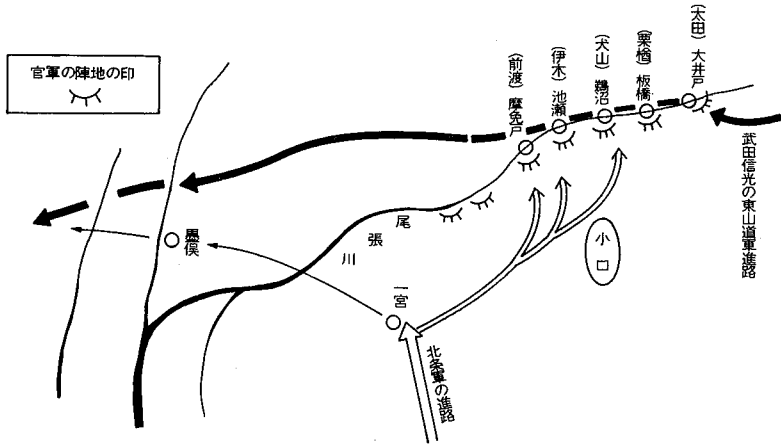


図2-48 承久の乱川張尾戦いの図

時房、朝時を大将として、東海・東山・北陸の三道より十九万と称する大軍をもって西下した。

これに対して上皇方では、この防禦を木曾川の九瀬において果たすべく、この地に大軍を集中した。

木曾川の九瀬とは、大井戸渡（可児郡土田付近）、板橋渡（栗栖尾付近）、摩免戸渡（前渡付近）、鵜沼渡（大伊木・小伊木付近）などで、とくに鵜沼・前渡を防衛の主要地点とした。

しかるに上皇方の運命をかけた九瀬の渡の尾張川での防戦は、敗れ去り、西にのがれるのを追って関東勢は、なだれをうって京都にはいった。

この戦によって、当時不安定であった北条氏の政治的位置が安定し、長期におよぶ武家政治の基礎は、かたまっていったのである。

生活 当時、大口付近には木曾川の分流が幾条も流れ、川沿いの地域では魚介類に、山野では鳥獣に恵まれ住民は

漁・狩猟をするとともに、水利のよい肥沃な地では、奈良時代より続いた稲が栽培され生活を支え、他方水の不便な土地では桑・漆などがかなり多く栽培され、鎌倉時代の後期には二毛作もはじめられ

るなど、農業技術もかなり進歩した。

しかし木曾川の氾濫のたび洪水によって分流が溢れ、土地は荒れ、収穫は皆無となるなど凶作もあり、このために飢饉を招く苦難の時代が続き、世相は混乱し人身売買が各地で公然と行われた。

また農民が生産した米をはじめ各種の畑作物は領主、地頭、荘官に納め、ほとんど手もとに残らず厳しい方法がとられ、農民の反発が各地で起る原因となっていた。

この時代にはまだ武士、農民の身分は確立しておらず、武士でも平常は農業につき、戦いが発生すると近在の屈強な農民を募って立ち上がるということであった。

寺院と神社

中世社会の中で新しい仏教の真宗、禅宗の発展が目ざましく、とくにこの地方では既成の教えにかわって禅宗系の仏教が人々の心をとらえ、大きな勢いとなって広がった。

扶葉町山名に生まれた高僧悟溪宗頓が、この地に禅の教えを説いたのもこの時代であって、町内の徳林寺をはじめ妙徳寺、桂林寺の創建も時期が同じで、村の発達と併せて本町においても禅宗の移入がさかんであったことを示し、

表2-5 寺院の宗派別数（中世紀においてすでに創建されて寺院・尾張志による）

郡・村	天台宗	真言宗	浄土宗	禅宗	真宗	日蓮宗	計
丹羽郡の全領域	四	一三	一三	五五	三三	七	一二五
大口町	一	一(一)	一(一)	五(六)	一(一)	一	

()は江戸期における寺院数

薬師如来像や長松寺に安置されている鑄鉄地藏尊像などいずれも鎌倉時代から室町時代の作で、中世の美術を現代に伝えるとともに、新しい仏教の広がりや民間信仰の芽生えを示している。

また町内の神社の勧請をみても、この時代からの伝承が多く農地の開発による生産の増大、村経済の発達や寺院の創建と同様に、村づくりが本格的に行われた年代でもあることを物語っている。

第二節 戦国時代

大久地城 麻のごとく乱れた戦国争乱の社会は、支配者である武士階級に対して農民の激しい抵抗―土一揆、逃散―など新しい力を生んでいったが、しだいに統一の気運に向っていった。

その最初の成功者は織田信長であり、尾北の地は、彼の活躍の基盤となったところである。(これについては従来
の歴史の中にあきらかになつていかなかった。)

織田氏は平家の出であり、代々越前国織田庄の神官で管領斯波氏に仕えていた。

斯波代が尾張の守護となつたので、その名代(守護代)となつて尾張に移り、応永七年(一四〇〇年)には織田郷広(稲沢の下津(おりず))に城を築くまでに至り、しだいにその勢力を固めてきた。

郷広には、敏広、広近、敏定の三子があり、長男敏広のために岩倉城を築いて尾張上四郡(丹羽、葉栗、中島、春日井)を統治させ、三男敏定を清洲城において尾張下四郡(海東、海西、愛知、知多)を統治させた。二男広近には、本町小口おぐちの地内に城を築かせ、信州、美濃に備えさせた。